1部70円(税抜き)

対がん協会報

第627号　2015年(平成27年)9月1日(毎月1日発行)

公益財団法人 日本対がん協会　「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です
〒100－0006　東京都千代田区有楽町2－5－1　有楽町センタービル(マリオン)13F
☎(03) 5218－4771　http://www.jcancer.jp/

主な内容

1～5面　朝日がん大賞・日本対がん協会賞
6面　2015年度のがん教育始まる
8面　RFLグローバルカンファレンス報告

朝日がん大賞　日本がん治療認定医機構に

日本対がん協会賞は5氏1団体に

日本対がん協会は9月1日付で、2015(平成27年)年度の朝日がん大賞を、がん患者団体の要望を反映させたがん治療医認定制度を確立した、一般社団法人日本がん治療認定医機構(平岡真寛理事長)に贈ると発表した。

また、日本対がん協会は、がん征圧活動に大きな功績のあった5氏と1団体に決まった。9月4日に群馬県前橋市で開かれる「がん征圧全国大会」で表彰される**(2～5面に受賞者の紹介)**。

一般社団法人日本がん治療認定医機構は、日本癌学会、日本癌治療学会、日本臨床腫瘍学会、全国がん(成人病)センター協議会の4団体の連携によって2006年に設立された。15以上のがん患者団体とも連携しながら、国等の資金を使うことなく、患者中心のがん治療認定医(身近にいるがん治療の総合医)をこの10年で約1万4400人育成してきた。

がん患者団体との連携で、がん患者の要望にも応える「がん治療認定医」制度を確立し、第一線の医師育成を達成したことが高く評価された。

日本がん治療認定医機構の認定医試験会場

日本対がん協会賞個人の部に選ばれたのは、群馬県がん患者団体連絡協議会顧問の本田攝子氏(66)、前鹿児島県消化器がん検診推進機構会長の澁江正氏(79)、水戸協同病院名誉院長の三井清文氏(77)、NTT西日本大阪病院総長の今岡真義氏(76)、愛媛県医師会長で久野内科院長の久野梧郎氏(71)の5氏。それぞれの地域で、がんの早期発見・早期治療の啓発やがん患者支援、精度の高い検診体制の確立に尽力し、地域住民の健康に大きく貢献したことが評価された。

日本対がん協会賞団体の部には、健診受診機会の少ない働く女性のために、日曜日に乳がん検診と併せ、子宮がん検診も実施している兵庫県の加古川総合保健センター(河合勝理事長)が選ばれた。

朝日がん大賞は、日本対がん協会賞の特別賞として、朝日新聞社の協力で2001年に創設され、今年で15回目。日本対がん協会賞は48回目で、がん征圧活動に功績のあった個人や団体に贈られる。

選考委員は次の通り。垣添忠生・日本対がん協会会長(委員長)、武藤徹一郎がん研有明病院メディカルディレクター・名誉院長(副委員長)、横倉義武・日本医師会長、大内憲明・東北大学大学院医学系研究科教授、津金昌一郎・国立がん研究センターがん予防・検診研究センター長、桑山朗人・朝日新聞社科学医療部長、秋山耿太郎・日本対がん協会理事長。

訂　正

対がん協会報第626号の1面で、がん征圧全国大会の大会テーマを「集い　語らい　思いは未来に」としましたが、「集い　語らい　想いは未来に」の間違いでした。訂正いたします。

がん相談ホットライン　祝日を除く毎日
03-3562-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3562-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

医師による面接・電話相談(要予約)
予約専用　03-3562-8015

日本対がん協会は、専門医による面接相談および電話相談(ともに無料)を受け付けています。いずれも予約制で、予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までに☎03-3562-8015へ。相談の時間は電話が1人20分、面接は1人30分(診療ではありません)。詳しくはホームページ(http://www.jcancer.jp/)をご覧ください。

朝日がん大賞

身近にいるがん治療の総合医　全国に約1万4千人育成
患者団体の要望を反映させたがん治療認定医制度を確立

一般社団法人日本がん治療認定医機構（理事長：平岡真寛・京都大学大学院医学研究科教授）

基本理念は患者のため

「がん患者を総合的に診られる医師を作ってほしい」

そうした患者団体の要望を反映させた「がん治療認定医」制度を確立したのが、日本がん治療認定医機構だ。

日本がん治療認定医機構は、縦割りになっていた単独学会主導の専門医・認定医養成方式とは別に、日本癌学会、日本癌治療学会、日本臨床腫瘍学会、全国がん（成人病）センター協議会の４団体の連携によって2006年に設立された。15以上の患者団体とも連携し、この10年で、患者の身近にいるがん治療の総合医である「がん治療認定医」を全国で約１万4400人育成してきた。

機構が生まれるきっかけとなったのは、2003年に日本学術会議が出した発議だった。当時のがん治療は、内科や外科、放射線科といった各科の縦割り状態になっていたことから、患者のための横断的ながん治療の専門家養成を求めていたものだった。これを受けて、当時この問題を検討した学術会議の委員会委員だった今井浩三・東京大学医科学研究所特任教授らが具体化への準備を始め、日本医学会（高久史麿会長）にも働きかけた。05年６月には日本医学会からも、「がんに関する基盤的な幅広い知識・技術を取得していることを認めるがん治療認定医制度」の設置を求める提言が出された。

この提言を受ける形で同年11月に日本癌学会、日本癌治療学会、日本臨床腫瘍学会、全国がん（成人病）センター協議会の４団体の有志がワーキンググループを結成。国の資金も使わず、手弁当で教育カリキュラムなど組織作りの検討を15以上の患者団体とも協議して進め、06年12月に日本癌治療認定医機構を設立。今井さんが初代理事長となった。

がん治療全般がわかる総合医

患者団体からは、「外科からは手術を勧められ、放射線科からは放射線治療を勧められるなどして、どれが正しい選択かわからない」と、がん治療全般がわかるがん総合医の育成を求める声が強かった。がん治療認定医は、そうした要望を受け、「患者のため」との基本理念のもとに、「各科の共通基盤となる臨床腫瘍学の知識や基本技術に習熟し、医療倫理に基づいたがん治療を実践する医師及び歯科医師」と位置付けられ、育成が進められた。

まず全国のすぐれたがん臨床医の中から暫定教育医を選定し、この教育医を指導責任者とした認定研修施設（約1200施設）を選定し、受験生にセミナー受講や受験の機会を与えている。07年の最初のセミナーには4000人以上の応募があり、その後も毎年約2000人が応募し、これまでに１万４千人を超える認定医が全国に誕生した。

がん治療認定医には歯科医師（口腔外科）が含まれているのも特徴だ。歯の健康とがんとの関連も明らかになってきたためで、歯科医師のがん治療認定医も400人近くになった。

年代も30代から40代が多く、「身近にいるがんの総合医がこれだけ全国に広がったことが誇り」と今井さんは話す。

都市部だけでなく地方の病院、診療所、クリニックにも患者中心のがん治療認定医が配置され、その養成システムも定着したことで、全国の第一線で働く医師や歯科医師のがん診療レベルの向上やがん予防にも大きく貢献することになった。

新たな専門医制度にも寄与

また、日本の専門医制度は2017年度から各学会ではなく、中立的な第三者機関である日本専門医機構が認定する新たな制度に移行するが、日本がん治療認定医機構も、日本専門医機構に社員として参加し、この新制度に何らかの形で活用されることが検討されている。

がん治療認定医は、更新制度（５年）もスタートし、がんのことを広く浅く知っている人材を輩出する制度として

日本がん治療認定医機構の教育セミナー・認定医試験の会場に集まった受験生たち

専門医制度とは別にさらに発展していくことになるが、平岡真寛理事長は「新たな専門医制度の中での各専門医におけるがん教育や、新たな専門医制度の確立に寄与していきたい」と話す。

西山正彦副理事長（群馬大学大学院教授）も、「がん医療の均てん化とボトムアップに寄与してきたがん治療認定医制度のコンセプトが、新たな専門医制度の中でも生かされるようにしていきたい」としている。

がん治療認定医制度は世界に類のない制度であり、今後より大きな役割が期待されている。

日本対がん協会賞

各地の地域住民の健康に貢献

個人の部

大阪のがん死亡減少に尽力

今岡 真義（いまおか・しんぎ）76歳　NTT西日本大阪病院総長

大阪大学医学部卒業時は内科医志望だった。しかし、インターン時代、小外科を中心とした研修を続けているうち、外科に興味を持ち第２外科に入局し、消化器外科の道に。大阪府立成人病センターでのレジデントを経て、大阪大学医学部第２外科に戻ってから、肝胆膵のグループで手術の研鑽を積んだ。1977年に大阪府立成人病センターの外科部長となり、肝臓がんの大きな手術は一手に引き受けることになった。大阪は地域的にも肝臓がんの患者が多く、「何とかせなあかん」と、肝細胞がんの治療成績向上に尽力した。

肝臓がんの治療の傍ら、膵臓がんグループの治療にも取り組んだ。膵臓がんは、発見が難しく、判った時はすでに進行がんであることが多かった。長期生存率を高めるには早期発見が不可欠と、内視鏡で採取した膵液の細胞診を組み合わせ、より早期のすい臓がんを診断し、少しでも膵を残して根治を得る膵分割切除法の開発に尽力した。

しかし、進行がんの外科治療には限界を感じていた。2004年に大阪対がん協会会長に就任すると、「がん予防に力を入れないといけない」と検診受診率向上に力を入れた。「医師だけがいくらがんばっても駄目だ。がん対策は国民全ての問題だ」との思いから、協会の役員に看護師や患者代表も加え、協会のがん研究助成の対象も看護師等へ広げるなど、協会の改革も進めた。

08年にNTT西日本大阪病院の院長・総長となってからも、毎月の患者会などの会合に顔を出す。検診を受けた人と受けなかった人の間のがん５年生存率の違いをグラフなどで示し、府民のがんへの意識を変えようと、取り組んでいる。院内にがん患者のがん患者によるがん患者のための「がん何でも相談室」を設置するなど、多方面のがん対策にも奔走している。

鹿児島の胃がん検診技術向上に50余年

澁江 正（しぶえ・ただし）79歳　前鹿児島県消化器がん検診推進機構会長

鹿児島大学医学部３年生の頃、当時第２内科の佐藤八郎教授から夏休みに県内各地を巡回する胃がん検診の手伝いを誘われたのが胃がん検診との出会いであった。勉強ができて日当254円（ニコヨン）を頂き、夜は焼酎が飲める「ハッピーな」学生時代を過ごした。

1961年に県内で始まったばかりの胃の集団検診に当初から携わった訳だが、医学部卒業後は大学院で病理学を専攻。第２内科で診断された胃がんを、胃生検を含め顕微鏡でさらに詳しく調べる研究で学位を得た。その後第２内科に戻り、胃がんに対して臨床と病理の両面で対峙してきた。84年からは鹿児島県消化器集団検診研究会（現在の鹿児島県消化器がん検診推進機構）の大学病院代表の役員として、研究会の読影などにも関わるように。

99年から2013年までは研究会の会長を務め、間接撮影の技術向上、間接読影の人材育成、精度向上に尽力してきた。さらに要精検査となった人のがんの見逃しを減らそうと、県下各地の医師会の講演会、研究会グループの症例検討会に参加し、精密検査の精度向上に力を注いだ。

大学での内視鏡の診断・治療の研究、病理学教室での研究経験から、内視鏡で見た病変の表面の形からがんがどこまで進展しているのかピンとくるようになった。その経験から症例検討会ではレントゲン写真・内視鏡写真と共に切除標本も提示して診断することを強く訴え、精密検査の精度レベルの向上に尽力。その指導力で精検医療機関の診断技術の向上に貢献し、鹿児島県の胃がん検診のみならず県民の健康管理に対する意識向上のためにも中心的役割を担ってきた。休日のゴルフと夜の焼酎が元気の源となっている。

5大がん検診の精度管理に尽力

久野　梧郎（ひさの・ごろう）71歳　久野内科院長

1969年に徳島大学医学部を卒業し、呼吸器内科を志す。当時肺がんの増加は予測されていたが、先ずは肺結核を勉強しようと、国立療養所東徳島病院に勤務。清瀬結核研究所、徳島大学第３内科（講師）、米国NCIフレデリックがん研究所などを経て84年に松山市で開業した。日常診療のかたわら98年には「愛媛肺がんをなくす会」の立ち上げに参画した。

2004年からは愛媛県医師会長を務める一方、07年から愛媛県総合保健協会（日本対がん協会愛媛県支部）理事長として、検診の精度向上を目指し、肺がん、胃がん、大腸がん、乳がん、子宮がんの各部門に精度管理委員会を発足させた。強い指導力のもと優秀な人材を確保し、全体の診断能力の向上と技師の技術向上に力を注いだ。

また全国支部に先駆けて検診車のデジタル化を行い、13年には全ての部門において実現した。精度管理委員会には内部の人材以外に各部門において外部の専門医を迎え、精密検査受診率の向上のため未受診者対策など一つ一つ積み上げを行った。五大がんの精度管理では全国に誇れる水準にまで引き上げることに貢献した。一方で、子宮がん検診における細胞診HPV併用検診に加え、14年度には遺伝子検査装置を導入し、自施設内でのHPV検査制度を確立するなど、先進的な取り組みも主導した。また、読影医が減少してきている胃がん検診のあり方などについて「環境の変化に対応できる体制にしていかなければならない」と話すなど、将来を見据えて目を光らせている。

多忙な毎日の中、休日のテニス、ゴルフ、コーラスなどが息抜き。「独自のレシピによる朝のジュースも元気の素」と健康管理に気を配っている。

群馬のがん患者支援に19年

本田　攝子（ほんだ・せつこ）66歳　群馬県がん患者団体連絡協議会顧問

1995年に右胸に乳がんが見つかり、全摘手術を受けた後、再発の不安に悩まされ、友人の紹介で全国的な乳がん患者会「あけぼの会」に入会した。東京での会合に参加し、がん経験者の話を聞いているうちに元気になった。群馬にも多くの会員がいたが、集まったことがなかった。「みんなで顔合わせをして、近くに仲間がいるということが感じられるように」と、翌年、群馬県に支部を設立、支部長に就任した。

以後19年にわたり、自らの体験を生かして、がん経験者同士で励まし合い、支え合いながら心のサポートを行う患者支援活動や、乳がんの早期発見・早期治療の重要性をアピールするキャンペーンに取り組んできた。

2007年にあけぼの会あけぼの群馬となって独立してからもその代表としてがんサロンも開設するなど、がん患者が気軽に集まり、１人で悩みを抱え込まない環境作りに尽くしてきた。「人に会って話すことで元気が出る」。自らの体験に基づいた思いで活動を続ける。

同年に群馬県がん患者団体連絡協議会が発足すると、その初代会長に就任。それまであまり横のつながりがなかった群馬県内のがん患者の各患者会とも交流を深め、連携を図ってきた。群馬県がん対策推進協議会委員も務め、県内の患者会の代表としてがん対策にも取り組んできた。2013年には群馬県で初めてリレーフォーライフ実行委員長も務めた。

一昨年左胸に乳がんがみつかった。20年前の初発のときは不安でたまらなかったが、患者支援活動を通じ仲間がいると感じられる今回は「来るなら来い、という気持ちで温存手術に臨めた」。今回の発見も毎年受けていたマンモグラフィー検診によるもの。「やっぱり検診は大事だと感じました」と話す。

茨城の肺がん検診の精度管理に約30年

三井　清文（みつい・きよふみ）77歳　水戸協同病院名誉院長

東北大学医学部を1962年に卒業後、「肺がん研究に取り組みたい」と、東北大学抗酸菌病研究所（現・加齢医学研究所）を経て筑波大学で肺がんの外科新術式の開発やがん免疫療法にも取り組んできた。こうした研究と診療のかたわら、筑波大臨床医学系助教授だった1985年に茨城県総合健診協会がん検診研究委員会委員に就任。以後約30年にわたり、茨城県の肺がん検診の読影を中心に検診の精度管理に従事し、肺がんの早期発見に尽力した。

水戸協同病院の病院長に就任した1998年からは茨城県生活習慣病検診肺がん部会の委員として、県内の各市町村や各検診実施機関に対して、検診

実施方法や精度管理のあり方などについて専門的な見地から適切な指導し、肺がん検診の推進に努めた。「集団検診で要精検になっても精密検査を受けない人が未だに多い」と、水戸市の医師会などを通して、かかりつけ医からも要精検対象者に精密検査の受診を勧めてもらうよう働きかけるなど、精密検査の受診率向上にも力を入れた。

今では当たり前になったがん患者本人への告知について、77年に筑波大学病院に勤務した当時から「本当のことをわかりやすく説明するのが医師の務め」と、告知する方針を貫いてきた。98年に水戸協同病院院長に就任したときも、当時は進んでいなかったがん告知を全科で行うように進めた。周囲の反発も強かったが、がん告知によって「患者に本当のことを知らせ、本音で話せるようになって患者も積極的に治療が受けられるようになる」と、信念を貫いた。

2001年から水戸協同病院の名誉院長となり、現在は診療の現場からは離れたが、同病院の検診業務には今もかかわり続けている。がん征圧への活動は今なお続けている。

日本対がん協会賞　団体の部

働く女性へ日曜日に乳がん・子宮がん検診

加古川総合保健センター（河合勝＝かわい・まさる＝理事長）

1980年に加古川市医師会と加古川市の共同出資で設立された当初から、地域住民や事業所を対象にがん検診に取り組んできた同センターは、設立当初から土曜日にも検診を実施してきていた。そうした下地もあり、日本乳がんピンクリボン運動の一環であるジャパン・マンモグラフィーサンデー活動に賛同し、2011年度からは、健診受診機会の少ない働く女性のために、日曜日にも乳がん検診と併せ、子宮がん検診も実施している。

医師会と市の共同出資のセンターということで、医師会の協力も得られやすいことが日曜日の検診実施につながっている。がん検診全体では受診率が減少傾向にある中、子宮がん・乳がん検診ではこの10年で２倍前後に増えた。受診者の約８割が女性で、女性専用フロアを導入しているのも特徴だ。

特定健診受診者には、がん検診の同時受診勧奨を行って、受診率向上に努める一方、地元行政とも連携した健康関連イベントへの出展や、民間商業施設に出向いてのがん検診の必要性の啓発活動などを通して、受診率の向上に努めるなど、地域の拠点としてがん対策に取り組んでいる。

永年勤続表彰者

25団体　60人（敬称略）

◇北海道対がん協会
縣有、松館啓二、吉田晃暢、三浦 務
◇青森県総合健診センター
佐藤洋子、松井理起、佐藤公哉
◇宮城県対がん協会
今野祐蔵
◇秋田県総合保健事業団
深井聡子、三浦芳大、山元志保
◇やまがた健康推進機構
前田敦
◇茨城県総合健診協会
舟生安志、井上明子、宮川孝康、寺門真智子、星野智美、村上孝
◇栃木県保健衛生事業団
善谷昌弘、堀江聡、鈴木有美、小澤悠、阿部敬一、忽那洋子
◇群馬県健康づくり財団
須永昌美、長井美穂、蛭間渉、河村三枝子
◇埼玉県健康づくり事業団
齊藤輝樹
◇ちば県民保健予防財団
齋藤智子、四柳知春、横山裕美
◇長野県健康づくり事業団
中島美幸
◇岐阜県教育文化財団
今西瞳
◇三重県健康管理事業センター
中川朋子、竹岡義訓、山下千秋
◇京都予防医学センター
井川一典、松本美喜
◇兵庫県健康財団
惠美省吾
◇和歌山県民総合健診センター
嶋貫純一
◇広島県地域保健医療推進機構
藤井紀子
◇山口県予防保健協会
竹内幸彦、金子ミツエ
◇愛媛県総合保健協会
青木江里佳
◇高知県総合保健協会
中田徹、吉村文臣、森口美奈、畑山隆
◇福岡県すこやか健康事業団
舟越乾、吉原和美
◇長崎県健康事業団
木田勲、井手田加夫
◇熊本県総合保健センター
江川尚批呂、大濱留理子
◇鹿児島県民総合保健センター
松下知子、田中剛、前和臣、土器屋裕美
◇沖縄県健康づくり財団
山城由乃

がん教育　2015年度の取り組み始まる。各地で高まる協会への期待

文部科学省が2014年度から開始した「がんの教育総合支援事業」を受けて、全国の学校現場でがん教育への取り組みが加速している。とはいえ、学校現場では「どう取り組んだら良いのか」と頭を抱えているのが実情だ。そんな中、日本対がん協会への協力を求める声がますます高まっている。

昨年度からは単発の学校行事で終わらないように、地域の教育現場や保健行政などの意見交換の場を設けて「点から面へ」活動を広げてきた。

今年度は各県の教職員対象研修にも協力することになった。その第一回目が岩手県での取り組みだ。同県ではまず西和賀町の高校と小学校を推進校に指定してモデル授業を行い、その実践を踏まえて10月に行われる教職員対象の「岩手県学校保健講習会」を開催する。

岩手県西和賀町　生命尊重の地で出張授業

全校生徒に語りかける佐瀬先生

岩手県立西和賀高校で８月18日、全校生徒106人に向けてがん教育のモデル授業が行われた。講師は日本対がん協会とともに精力的にがん教育の出張授業を行っている、順天堂大学大学院医学研究科の佐瀬一洋教授。佐瀬教授は10月の教職員対象の「岩手県学校保健講習会」でも講演する。

西和賀町は県でも有数の豪雪地帯。前身の旧沢内村時代から「豪雪・貧困・多病多死」に苦しめられた歴史を持つが、1962年には全国で初めて乳児死亡率ゼロを達成した自治体として有名だ。

県教育委員会指導主事兼保健体育主事の高橋雅恵さんは西和賀高校をモデル授業の場に選んだ理由に、やはり生命尊重の歴史を持つ地だからと話す。菅野慎一校長も以前病弱な子どもたちが通う学校に勤務したことがあり、小児がんの子どもたちの教育に携わった経験を持つ。そんな背景からモデル授業が実現した。

西和賀高校ではモデル授業に先立ち、養護教諭の及川明奈先生が学年ごとにがんについて正しく理解するための事前指導を行った。がんの基礎知識を教え、グループ毎にがんについての疑問や質問を見つけてもらった。当日掲示された生徒たちの質問は、がんの仕組みから、どういう経過を辿るのか、がんになった時の気持ち、家族ががんになったらどういう風に支えてあげたら良いのかなど、多岐にわたり、その問題意識の高さに佐瀬教授も驚いていた。

佐瀬教授の授業のポイントは、①がんが増えたのは長寿化の結果②予防と早期発見が大切③誤った意識は病気より怖い、正しい情報を、の３点。特に正しい情報の大切さについては、自身が骨軟部肉腫とわかった時の体験をもとに、映画やドラマの誤った情報に振り回されないようにと話し、子どもたちも真剣に聴き入っていた。

生徒たちの質問を掲示

意見交換会　時間延長して熱心なディスカッション

講演の後に意見交換会が行われた。西和賀高校の教員の他、岩手県医師会理事、次に授業を行う町立小学校の教諭、養護教諭や校長、県や町の教育委員会、以前からがんを含む生活習慣病に関する出前授業を実施してきた日本対がん協会岩手県支部など、大勢の関係者が参加して、佐瀬教授を中心に熱心な意見交換を行った。

小学校の教諭からは「何を教えたらいいのかむずかしい。予防教育はできるが、予防してもがんになってしまう人もいる。脅かしでなくどう教えるか」、「小学生は単純なので、ちょっとした情報でころっと考えが変わってしまう。だからこそ一層慎重さが必要」など難しさを語る意見が多かった。岩手県支部からは「小学生の教材には『がんちゃんの冒険』が好評だった。子どもの反応がとてもよかった」という声も。

高校生については「高校生が最適、グループワークをすると反応が良かった」「職業につなげるような面を入れると未来志向で良い」など好意的な意見が多かった。

意見交換会の参加者にも自分ががんを経験したり、身内をがんで亡くしたりした人もおり、「自分の経験はまだ冷静には話せない」という率直な声もあった。一方、「自分もがんを経験したが、その経験からいってもやはり知識は絶対大事」という意見もあり、様々な立場から熱心な意見交換が行われた。

Topics

朝小サマースクールで禁煙を呼びかけ

日本対がん協会は８月８日、９日に昭和女子大学で開催された「朝小サマースクール2015」に出展し、８日に健康教室「親子でたばこについて考える」を開催した（支援：顎咬合学会）。

講師は山王病院副院長で呼吸器外科の専門医である奥仲哲弥先生。テレビ「サンデージャポン」でもおなじみの軽妙な語り口で、煙草の害を豊富な例や写真を示してわかりやすく解説した。当日は事前に参加申し込みをした親子のほか、ぜひ聞きたいという親子も数組加わり、約35名の親子が熱心に聞き入った。

「たばこを吸うのは病気なんだよ」。ざわっとする会場を見渡して奥仲先生が話し出した。たばこをやめられないのは、ニコチンに強い依存性があるから。がんなどの原因になるのはタール。たばこを吸い続けた人のタールがべったりしみついたような肺の写真を見せると、会場がどよめいた。ニコチンには依存性以外にも血管を縮めるという大きな害があり、たばこを吸い続けた結果、双子の女性の一方が親子とまちがえられるほど老け込んだり、歯茎がぼろぼろになったりした人の写真を示しながら解説した。

歴代禁煙ポスターの前で子どもたちと

奥仲先生は呼吸器の専門医として、喫煙者の手術が非常に難しい事や、手術前に最低一か月禁煙をしないと手術ができないことなどを話し、「それが悔しいからこうして話し続けているんだよ。みんなもぜひ今日聞いたことを他の人に教えてあげて下さい」と話すと、会場の子どもたちも真剣に聞き入っていた。

朝小サマースクールは「親子に夏休みのよい思い出、楽しい学びの場を提供する」目的で朝日小学生新聞が2007年から主催している。講演や、様々なワークショップ、展示などを目当てに今年も１万５千人の親子が参加した。

日本対がん協会は奥仲先生の講演の他、がん教育DVD「がんちゃんの冒険」の上映、たばこに関するクイズ、歴代禁煙ポスターの展示などを行い、二日間で延べ500人の参加者を集めた。

はーい座布団一枚！　北海道支部から

「あなたに役立つがんのおはなし」～草の根・健康講話～

公益財団法人北海道対がん協会
事務局長　相澤　信之

北海道の市町村数は179と、２位の長野県（77市町村）の2.3倍。市町村ごとの検診の委託形態も様々だ。なので、普及啓発事業を行うにしても、多岐にわたる取組みが必要となる。

昨年７月に就任した当協会の長瀬清会長は、自ら町内会へ出向く健康講話を始めた。がん検診を受けたことがない人や、しばらく検診から遠ざかっている人の意識を変えるには、身近な人のひとことのほうが効果的だろうというのが、町内会に着目したきっかけだった。現在までに当協会と関わりの深い８地区で実施し265名が受講。好評を得ている。

アットホームな雰囲気の講話

町内会となると、家庭の主婦、それも子供が自立した中高年女性が多い。健康教育といえば、パワーポイントで最新のデータをふんだんに盛り込んでというのが主流だが、この講話では、あくまでも長瀬会長が話すだけ。聞く方も、ゆっくり、じっくり耳を傾ける。それでもわからなければ質問する。おかげで「わかったつもり」が少なくなり、記憶に残る時間が長くなっているように感じる。そして、家に帰ってから、家族や友人へも話すように伝えている。

もちろん当協会としては市町村や学校、企業などから依頼を受けて、時にはこちらから企画を持ちかけて、医師や保健師、放射線技師などの専門職を派遣する健康教育を毎年40回程度実施している。しかし、単発の実施が多く、そのときは反応がよかったとしても、のどもとを過ぎればなんとやらで、検診に行くような動きには結びついていないからだ。

当協会では、今年で47回目を迎える「がん予防道民大会」を昭和40年から全道各地で開催し、広く道民に対してがん予防や検診の大切さを訴えている。この大会には毎年、多数の参加者がいるが、初回受診者の開拓という意味では、がん予防の意識がうすい方々にもっと働きかけたい。

健康教育の効果をはかるのは難しいし、北海道という広大な地域性からマンパワーに限界があるが、今後も住民へ直接訴えかける、地道なこの草の根運動を大切にしていきたい。

（あいざわ　のぶゆき　1979年大学卒業後、財団法人北海道対がん協会入社。旭川がん検診センター事務長、総務部長、札幌がん検診センター事務長等を経て、現職に至る。）

RFL “One World One Hope”の想いは世界共通

米国でのグローバルカンファレンスに参加して

８月上旬、リレー・フォー・ライフ（RFL）を開催する世界20か国および全米各地の代表者が集い「Global RFL Leadership Conference」がテキサス州ダラスで開催された。４日間、大小さまざまな形の会議を通じて熱気あふれる議論と交流が繰り広げられた。

熱気あふれるカンファレンス会場

前半２日間はGlobal RFLのセッションがあり、アメリカ対がん協会（ACS）が集約した20か国のデータを分析、世界の対がん活動の動きについて発表した。

ACSのCEO Gary Reedyや、リレーの母と呼ばれるPat Flynnの話を聞く貴重な機会もあった。Gary Reedyは長年にわたるACSのボランティア活動を経て、今年３月にジョンソン＆ジョンソンの副社長職を退き４月にACSのCEOになった。

「RFLは世界的なムーヴメントでもはや無関心ではいられない活動となっている。私たちリレーヤーはイノベーターでありRFLで世界を変えることが出来るのだ」という言葉が印象に残った。

翌日からは全米ボランティアとのセッションだった。約1,300人が一堂に会し会場は熱気に包まれた。サバイバー、ケアギバー、スタッフ、ボランティア、チームキャプテン、RFLからの資金援助で研究開発を進める研究者など、それぞれの立場で壇上に上がり決意表明をした。登壇者はまず、地名や団体名、どれだけの寄付を集めたかを言い、拍手、歓声があがった。

寄付がRFLの価値を高めるのは、実際に命を救われ、人生に希望の光を与えられたという体験や、医療の発展への貢献、治療中滞在施設の充実や、地域のがん教育への取り組みなどの数々の貢献をしているからだと実感した。

ワークショップもあった。ミッション、ファンドレイジング、リーダーシップなどがテーマだった。

最終日も広報、ネット活用法、寄付集め、会場内でのアクティビティーやセレモニーなど多岐にわたるテーマのワークショップが開かれた。閉会式では会場が一体となり最高潮の盛り上がりの中全日程を終了した。

特筆すべきは学生をはじめ若者のモチベーションの高さで、競争心が効果的に作用し、多額の寄付を集めるなど支援活動をリードする存在となっていた。RFLの活動に誇りを持ち、さらなる貢献のために自分のスキルを磨こうとする姿勢には頭が下がった。将来のRFLの発展が感じ取られ、日本の目指す方向としても刺激を受けた。

Global RFLの今年のテーマは“Paint Your World PURPLE　～世界を紫に染めましょう～”だ。国ごとに文化や習慣の違いこそあれ、がん征圧に国境はない。世界25か国で開催されているRFLがさらに増え、世界地図がRFLのシンボルカラーである紫に染まるその日まで、私たちのミッションは続く。

（日本対がん協会リレー・フォー・ライフ担当　是沢聡子）

2015年度　リレー・フォー・ライフ・ジャパン　秋の開催一覧

日　程	開催地（★初開催）	会　　場
【9月】		
5（土）～6（日）	★青森市	マエダアリーナ（新青森県総合運動公園）
	福井市	ふくい健康の森
	芦屋市	芦屋市川西運動場、体育館、青少年センター
	広島市	広島市立広島特別支援学校
12（土）～13（日）	★釜石市	シープラザ釜石　遊
	一関市	一関遊水地記念緑地公園
	さいたま市	農業者トレーニングセンター緑の広場
	長野市	篠ノ井中央公園
	松本市	やまびこドーム
	静岡市	静岡県立大学　芝生園地
	福岡市	海の中道海浜公園
19（土）～20（日）	栃木県 壬生町	壬生町総合公園陸上競技場
	川越市	川越水上公園　芝生広場
21（月祝）～22（火休）	★新潟市	新潟県スポーツ公園
22（火休）～23（水祝）	横浜市 新横浜	日産フィールド小机
26（土）～27（日）	東京上野	上野恩賜公園
	横須賀市	神奈川県立保健福祉大学
	岡崎市	暮らしの杜
	★佐賀市	どん３の森公園

日　程	開催地（★初開催）	会　　場
【10月】		
3（土）～4（日）	横浜市 みなとみらい	臨港パーク
	静岡県 長泉町	長泉町桃沢野外活動センター
	大和郡山市	奈良県郡山総合庁舎グラウンド
	徳島市	東新町商店街
	延岡市	延岡市北川運動公園多目的グラウンド
10（土）～11（日）	豊川市	豊川市総合体育館前広場
	岐阜市	岐阜大学医学部附属病院内 ホスピタルパーク
	小松島市	しおかぜ公園
	高知市	高知大学農学部グラウンド
	大分市	大分スポーツ公園 大芝生広場
11（日）～12（月祝）	大阪市	旭区民センター
17（土）～18（日）	前橋市	群馬県総合スポーツセンター ふれあいグラウンド
	松山市	城山公園堀之内地区　ふれあい広場
24（土）～25（日）	近江八幡市	休暇村近江八幡（宮ヶ浜）
31（土）～11/1（日）	貝塚市	市民の森（シェルシアター）
【11月】		
14（土）～15（日）	★浦添市	浦添総合運動公園

リレー・フォー・ライフ　検索